



Official journal of the  
Japanese Society of Psychiatry and Neurology

# PCN

PCN だより Vol. 73, No. 8

## Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 73 (8) は、PCN Frontier Review が 2 本、Review Article が 1 本、Regular Article が 6 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を、海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

### PCN Frontier Review

*Hikikomori*: Multidimensional understanding, assessment, and future international perspectives

T. A. Kato\*, S. Kanba and A. R. Teo

\*Department of Neuropsychiatry, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, Fukuoka, Japan

ひきこもり：多面的理解，評価，そして将来の国際的展望

重篤な社会的閉じこもりの一形態であるひきこもりは、1970 年代頃から若者や青年を中心に認められており、特に 1990 年代後半以降に注目されるようになった。最近ではひきこもり様の症例が日本以外の多くの国で報告されている。ひきこもりは個人の精神健康や社会参画ばかりでなく教育・労働力の安定といったより広い側面にも負の影響を与え、新たな喫緊の世界的課題である。この総説では、ひきこもりの歴史、定義、診断評価、介入に関して紹介し、日本以外での国際的なひきこもりの発生についても紹介する。著者らは、

国内および国際的視点からひきこもりのグローバル化に関する仮説を呈示する。さらに、著者らが開発した最新のひきこもり評価システム（「将来の DSM/ICD 診断システム用に提唱しているひきこもり診断基準」最新版を含む）を紹介し、家族アプローチや個人セラピーなど治療的戦略に関しても提案する。最後に、国際化するひきこもりの打開に向けて将来取り組むべき課題を呈示する。

### PCN Frontier Review

Prevalence of mental disorders and mental health service use in Japan

D. Nishi\*, H. Ishikawa and N. Kawakami

\*1. Department of Mental Health, Graduate School of Medicine, University of Tokyo, Tokyo, 2. Department of Mental Health Policy, National Institute of Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry, Tokyo, Japan

日本における精神疾患の有病率と精神保健サービスの利用

日本も含め、国際的に精神疾患の疾病負荷 (disease burden) が高いことが認識されている。疫学的データを用いて精神疾患の有病率および精神保健サービスの利用を長期にわたってモニターし、国ごとの精神保健の状況を考慮した適切な政策や対策を計画することは

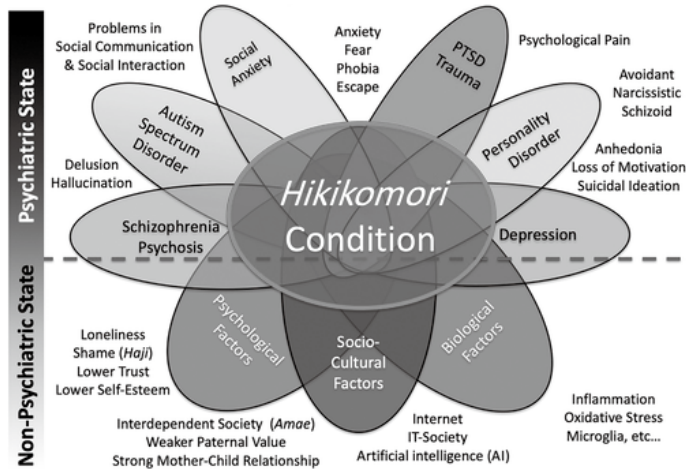


Figure 1 Location of *Hikikomori* in psychiatry : Bio-psycho-socio-cultural model. IT : information technology, PTSD : post-traumatic stress disorder  
(出典 : 同論文, p.430)

重要である。この総説では、2000年代から2010年代までの日本における一般的な精神疾患 (common mental disorders : CMD) の有病率と精神保健サービスの利用頻度の傾向を概観したうえで、それらを他の国々と比較した。この総説は、日本におけるCMDの有病率が過去10年間にわたって比較的変わらない一方で、精神保健サービスの12ヵ月の利用率は約1.2倍から1.6倍に増加していることを明示している。このことから、精神保健サービスの利用の増加が、患者数の増加に寄与している可能性が高いと考えられる。また国際比較に関しては、日本におけるCMDの有病率は米国および欧州の有病率と比較してはるかに低く、精神保健サービスの12ヵ月の利用率も他の高所得国と比較して低い。精神保健サービスの利用が高所得国で増加しているにもかかわらず、世界のCMDの有病率は変わっていないことが精神保健疫学によって明らかにされている。治療の質および予防の格差は、将来的に取り組みられるべき課題と考えられる。

**Review Article**

Autism spectrum disorder : Trends in research exploring etiopathogenesis  
*Shreeya Gyawali\* and Bichitra Nanda Patra*  
\*Department of Psychiatry and National Drug Dependence Treatment Centre, All India Institute of Medical Sciences, New Delhi, India

**自閉スペクトラム症：疾病原因に関する調査研究の動向**

自閉スペクトラム症 (ASD) は神経発達障害の1つであり、罹患者は、社会とのかかわりおよびコミュニケーションに困難をきたし、反復行動がみられる。ASDは多因子性疾患である。遺伝子や環境の影響など、さまざまな危険因子が調査されている一方、その因果関係の理解に向けた取り組みが行われている。大多数の研究は、それ以前のエビデンスが自閉症の高い遺伝性を示唆してきたために、自閉症の根底にある遺伝学的原因を特定することに焦点をあててきた。こうした取り組みにより、自閉症に関連する遺伝学的要因の一部については知見の集積がなされてきている。しかし、最近の研究の傾向は自閉症の契機となりうるさまざまな環境要因の研究への関心が高まっていることも示している。こうした取り組みにより、捉えることが困難な疾患の理解に向けかつてないほどに近づいて

きている。今回のレビューでは、ASDの疾病原因に関する調査研究の最近の動向について考察する。

### Regular Article

Perceptions of traditional and modern types of depression : A cross-cultural vignette survey comparing Japanese and American undergraduate students

*J. Kashihara\**, *I. Yamakawa*, *A. Kameyama*, *M. Muranaka*, *K. Taku* and *S. Sakamoto*

\*1. Department of Psychology, College of Humanities and Sciences, Nihon University, Tokyo, Japan, 2. Population Mental Health Group, Melbourne School of Population and Global Health, University of Melbourne, Melbourne, Australia, 3. Japan Society for the Promotion of Science, Tokyo, Japan

従来型うつ病と現代型うつ病についての認識：日米の大学生を対象とした文化比較ビネット調査

【目的】うつ病は、多くのサブタイプ（下位分類）を含む多様性に富んだ疾患である。しかしながら、日本においては、「うつ病」という言葉がメランコリー型しか意味しないという誤解が広まっている。その結果、メランコリー型ないし「従来型うつ病（TTD）」とは対照的な特徴をもつ「現代型うつ病（MTD）」に対して、今日では強い偏見が抱かれている。本研究では、日本の集団主義的文化が現代的うつ病への否定的バイアスにどう影響しているかを検討するため、TTDとMTDについての認識を日米で比較する調査を実施した。【方法】日本の大学生303名と、米国中西部の大学生272名が調査に回答した。参加者は、TTDまたはMTDの症状を呈した架空の人物を描写した2種類のビネットを読み、それらのビネットをどのように認識したかを回答した。【結果】混合計画分散分析の結果、国（日本対米国）とビネット（TTD対MTD）の交互作用効果がほとんどの項目について確認された。これらの交互作用効果について、Bonferroni法による補正を施して下位検定を実施した結果、以下のことが示された。(i)日本人は、MTDのほうがTTDよりも症状が軽いと考えやすい。(ii)日本人はMTDの人物に対して、TTDの人物に対して以上に強い敵対的態度

をとりやすく、サポートを進んで提供しようという意図も弱くなる。【結論】これらの結果は、MTDをもつ人々が、日本の集団主義的文化よりも米国の独立的文化のなかでより受け入れられやすいことを示唆している。考察では、文化の多様性に関する教育によって、日本でのMTDに対する偏見を低減できる可能性があるということを議論した。

### Regular Article

Development and validation of the 22-item Tarumi's Modern-Type Depression Trait Scale : Avoidance of Social Roles, Complaint, and Low Self-Esteem (TACS-22)

*T. A. Kato\**, *R. Katsuki*, *H. Kubo*, *N. Shimokawa*, *M. Sato-Kasai*, *K. Hayakawa*, *N. Kuwano*, *W. Umene-Nakano*, *M. Tateno*, *D. Setoyama*, *D. Kang*, *M. Watabe*, *S. Sakamoto*, *A. R. Teo* and *S. Kanba*

\*Department of Neuropsychiatry, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, Fukuoka, Japan

樽味の「新型/現代型うつ」病前性格評価尺度22項目版—社会的役割の回避、不平不満、自尊心の低さ（TACS-22）の開発と妥当性の検討

【目的】病前性格を把握することは、特に治療方法を選択する際に重要である。歴史的にみると、日本の大うつ病患者の病前性格は執着気質（メランコリア気質に類似している）であるとされており、1930年代に下田によって提唱された。2000年頃から、従来とは異なる病前性格を有し抑うつを呈する青年についての報告が増加してきた。2005年に樽味はこの新しい病態を「ディスチミア親和型うつ」と命名し、さらに最近になってこの病態は「新型/現代型うつ」と呼ばれるようになった。著者らは最近になって「新型/現代型うつ」を評価するための半構造化診断面接を開発した。特に治療初期に短時間で病前性格を把握することが可能なツールの開発が望まれている。本研究の目的は「新型/現代型うつ」の病前性格を評価するための自記式調査票を開発することと、開発した尺度の精神測定的特性、診断的正確性、生物学的妥当性を検討することであった。【方法】臨床患者および地域住民あわせて340

名が参加し評価を完了した。精神測定学的特性は因子分析によって検討した。「新型/現代型うつ」の病前性格の診断的妥当性は半構造化面接と比較した。【結果】質問票は3つの下位尺度にわたって22項目を含んでいた。そこで著者らは『樽味の「新型/現代型うつ」病前性格評価尺度22項目版—社会的役割の回避, 不平不満, 自尊心の低さ (TACS-22)』と命名した。内的整合性, テスト再テスト信頼性, 収束的妥当性はすべて良好であった。大うつ病患者において, AUCは0.757 (感度63.1%, 特異度82.9%)であり, 尺度の得点は血漿中のトリプトファン濃度と正相関を示した。【結論】TACS-22は, 日本人成人を対象とした初回サンプルにおいて, 十分な精神測定学的特性, 診断的妥当性を保持していた。「新型/現代型うつ」の臨床的評価の補助ツールとしてのTACS-22の性能に関する追加研究が望まれる。

### Regular Article

Effect of adding individualized occupational therapy to standard care on rehospitalization of patients with schizophrenia: A 2-year prospective cohort study  
T. Shimada\*, M. Ohori, Y. Inagaki, Y. Shimooka, I. Ishihara, N. Sugimura, S. Tanaka and M. Kobayashi  
\*1. Department of Health Sciences, Graduate School of Medicine, Shinshu University, Nagano, 2. Medical Corporation Seitakai Mental Support Soyokaze Hospital, Nagano, Japan

統合失調症患者の再入院に対する標準的治療への個別作業療法追加の効果: 2年間の前向きコホート研究

【目的】われわれは通常の集団作業療法 (GOT) と比較した統合失調症患者の再入院に対する個別作業療法 (IOT) の効果を検討した。【方法】前向きコホート研究には, 精神科病院から1年以内に退院した統合失調症患者が含まれた。治療群 (GOT+IOT または GOT 単独) による再入院までの時間を Kaplan-Meier 生存分析で評価した。再入院に関連する人口統計および臨床的要因の影響を, Cox 比例ハザードモデルを使用して調査した。【結果】適格基準を満たした111名のうち, 54名が GOT+IOT 群, 57名が GOT 群であった。退院から2年間の追跡調査において, 全体の再入院率

は51.4% (56名)であった; GOT+IOT 群は GOT のみ群の40名と比較して16名の再入院で有意に低い再入院率を示した。再入院までの時間は, GOTのみ群と比較して GOT+IOT 群で有意に長かった ( $P<0.001$ )。多変量 Cox 比例ハザードモデルは, 作業療法の種別 (HR=0.543), 服薬遵守 (HR=0.343), 同居の援助者 (HR=0.450), 退院時の遂行機能 (HR=0.740) が有意に再入院に関連していたことを示した。【結論】われわれの結果からは, IOT を受けた患者が, GOT のみを受けた患者に比べて, 退院時の良好な認知機能と良好な服薬遵守を示すことに加え, IOT が GOT のみの場合と比べ, 再入院リスクの軽減に関しても長期的な効果を示すことが示された。

### Regular Article

Automatic classification of major depression disorder using arterial spin labeling MRI perfusion measurements

R. Ramasubbu\*, E. C. Brown, L. Daniel Marcil, A. S. Talai and N. D. Forkert

\*1. Department of Psychiatry, Cumming School of Medicine, University of Calgary, Calgary, 2. Department of Clinical Neuroscience, Cumming School of Medicine, University of Calgary, Calgary, 3. Mathison Centre for Mental Health Research and Education, Cumming School of Medicine, University of Calgary, Calgary, 4. Hotchkiss Brain Institute, Cumming School of Medicine, University of Calgary, Calgary, Canada

動脈スピニング MRI による灌流測定結果を用いた大うつ病性障害の自動分類

【目的】神経画像に基づく多変量パターン認識法は, 大うつ病性障害 (MDD) 患者と健常対照 (HC) とを識別する診断アルゴリズムの開発に用いられ, 成果をあげている。非侵襲的な動脈スピニング MRI により測定された脳血流 (CBF) の特徴を用いた MDD と HC との識別に向け, 正確度を備えた多変量分類法の開発および評価を行った。【方法】DSM-IV の基準に基づいて MDD と診断され, 薬物療法を受けていない患者22名および HC 22名の疑似連続 3D ASL 画像

を撮像し, CBF を評価した. 脳地図に基づくアプローチにより, 種々の脳領域の局所的な CBF を測定し, これとともに分類上の特徴として性別および年齢を用いた. 特徴の順位づけおよび選択, ならびに MDD 患者と HC との分類には, 線形カーネルサポートベクターマシンを用いた. 並べ替え検定を用いて, 分類結果の有意性を検討した. 【結果】MDD と HC の分類では, CBF の特徴に基づく自動分類子は統計的に有意な正確度 77.3% を示し ( $P=0.004$ ), 特異度は 80%, 感度は 75% であった. 分類に寄与した特徴は, 性別および局所的な CBF (皮質, 辺縁系, 傍辺縁系領域) であった. 【結論】CBF 測定結果に基づく機械学習モデルは, 高い正確度で MDD と HC との識別が可能である. より大規模な研究コホートを用い, 他の画像法の測定結果を対象にすれば, 臨床応用に必要な正確度を達成する分類子の性能が改善すると考えられる.

#### Regular Article

Shared preventive factors associated with relapse after a response to electroconvulsive therapy in four major psychiatric disorders

W. Omori\*, K. Itagaki, N. Kajitani, H. Abe, M. Okada-Tsuchioka, Y. Okamoto and M. Takebayashi

\*1. Division of Psychiatry and Neuroscience, Institute for Clinical Research, National Hospital Organization Kure Medical Center and Chugoku Cancer Center, Hiroshima, 2. Department of Psychiatry, National Hospital Organization Kure Medical Center and Chugoku Cancer Center, Hiroshima, 3. Department of Psychiatry and Neurosciences, Division of Frontier Medical Science, Programs for Biomedical Research, Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan

主要な 4 つの精神疾患における電気けいれん療法による治療反応後の共通の再発予防因子について

【目的】精神疾患において電気けいれん療法 (ECT) の有効性は確立しているが, 再発率の高さが大きな課題である. 本研究では, 相互に連続性のある主要な 4 つの精神疾患において ECT で改善した後の再発予防因子を探索した. 【方法】主要な 4 種類の精神疾患 255

名 (単極性うつ病 83 名, 双極性うつ病 60 名, 統合失調症 91 名, 統合失調感情障害 21 名) の診療録を後方視的に調査した. 【結果】各種の精神疾患において 1 年間の寛解維持率に有意な差はなく, 平均で 56.3% であった. 単変量解析の結果, 再発予防因子として 3 項目すなわち, 急性期 ECT 前の精神症状のエピソード回数の少なさ, 気分安定薬の導入, およびメンテナンス ECT の導入が抽出された. それらの 3 項目に, 年齢, 性別, および診断を加えて, 詳細に多変量解析を行ったところ, 急性期 ECT 前の精神症状のエピソード回数が少ないこと ( $P=0.003$ ), 炭酸リチウムの導入 ( $P=0.025$ ), バルプロ酸の導入 ( $P=0.027$ ), メンテナンス ECT の導入 ( $P=0.001$ ) が独立した再発予防因子として抽出された. 【結論】主要な 4 種類の精神疾患において, 炭酸リチウムとバルプロ酸のような気分安定薬とメンテナンス ECT の導入が, ECT 反応後の共通の再発予防因子である可能性が示唆された.

#### Regular Article

Trends and factors in antipsychotic use of outpatients with anxiety disorders in Taiwan, 2005-2013: A population-based study

C. -W. Huang\*, Y. -W. Chiu, P. -J. Chen, N. -W. Yu, H. -J. Tsai and C. -Mi. Chang

\*1. Department of Psychiatry, Chang Gung Memorial Hospital at Linkou and Chang Gung University, Taoyuan, 2. Division of Rehabilitation & Community Psychiatry, Department of Psychiatry, Chang Gung Memorial Hospital at Taoyuan, Taoyuan, Taiwan

台湾における 2005~2013 年の不安症外来患者に対する抗精神病薬使用の傾向および要因: 地域住民を対象とした研究

【目的】台湾では, 実際の診療で抗精神病薬の適応外使用が一般に行われているが, 特定の精神疾患に対する抗精神病薬使用の傾向に関しては情報が限られている. 本研究の目的は, 台湾における 2005~2013 年の不安症外来患者に対する抗精神病薬使用の傾向および関連する要因について検討することである. 【方法】台湾で外来受診をした不安症成人患者 (18 歳以上) を対象に, 連続 9 年間 (2005~2013 年) の抗精神病薬使

用に関する年間処方情報について、全民健康保険研究データベース (National Health Insurance Research Database) を用いて評価した。ロジスティック回帰分析を用いて、抗精神病薬使用の傾向および関連する要因について検討した。【結果】不安症に対する抗精神病薬の使用割合は、2005年の8.4%から2013年には9.1%に上昇した。この9年間を通じ、不安症患者では、第一世代抗精神病薬 (FGA) が、第二世代抗精神病薬 (SGA) より多く使用されていた。不安症の治療に最も多く用いられた FGA は、スルピリドおよびフルペンチキソールの2剤であった。特定の不安症 (心

的外傷後ストレス障害、パニック症/広場恐怖症、全般不安症、強迫症) 患者、女性、65歳未満であること、大うつ病または抑うつ状態の合併、抗うつ薬の併用、および精神科医、医療センター、かかりつけ医を受診する患者は、抗精神病薬処方の可能性が有意に高かった。【結論】抗精神病薬の適応外使用は、今回の全国的な集団を代表するコホートの不安症患者で有意な増加を示した。このような抗精神病薬の使用の増加はうつ病の増強療法に起因するものと考えられる。その有効性および安全性がまだ明らかにされていないことを考慮すると、さらなる研究が必要である。

## ■ Psychiatry and Clinical Neurosciences

Vol. 73, No. 9-10 表紙の作品解説

八島は、自宅から自分が通う施設までの道中で拾ってきたものでオブジェをつくる。実は最初は、持ち帰ってきたさまざまなものを施設の職員に見せた後に箱に入れてしまうだけだった。つまり彼には拾い癖があった。しかし O-157 による感染症が急増した 1996 年に拾うことを禁止されると、それらとセロテープを使ってオブジェをつくり始めたのである。

彼がつくるものは基本的に具象だ。ヘリコプターや新幹線のような大きな乗り物、バッタやカマキリなど小さな生き物、冠のような装飾品等々。サイコロのように、具象でつくっても抽象的に見えるものもあるのが面白い。

彼のしていることを、既存の概念で説明することは難しい。手元にある素材を使って組み立てているが、なにかに役立つような機能が生まれてはいないから、ブリコラージュだとは言いがたい。またゴミとも言えるものを組み合わせているわけだが、おそらく本人は既成の美意識を転覆させようと企図しているわけではないだろうから、アッサンプラージュとも言いがたい。

八島の作品は 2000 年頃から展覧会で紹介されるようになったが、時を同じくして彼は制作をほとんどしなくなった。その理由は、周囲が、八島が好みそうなものを持ってくるようになったからだと考えられている。アール・ブリュットかどうかを判断する条件のひとつに「自発的な制作」があることを考えても、制作意欲の変化をめぐるこのエピソードは一考に値する。

(保坂健二郎, 東京国立近代美術館)



タイトル：(左) かまきり (右) 自転車に乗った猫

作者：八島孝一

制作年：(左) 1998 年 (右) 1999 年

材料：(左) 電球, 油性ペン, フォーク, 金具, プラスティック類, 塩化ビニール, セロハンテープ  
(右) 三輪車のオモチャ (金属, ゴム), 洗濯バサミ (木, プラスティック, 金属), 針金, スプーン (プラスチック), 時計, プラスティック容器, セロハンテープ

サイズ：(左) 200×90×90 mm (右) 125×80×180 mm 収蔵：日本財団

**■ Psychiatry and Clinical Neurosciences**

Vol. 73 No. 11-12 表紙の作品解説

福井の作品には生き物がたくさん描かれている。人間や動物に見えるものもあるけれども、人間や動物と呼ぶのは躊躇われるものもある。そんなとき人は、この地球上にはいなさそうな生き物という意味において、「宇宙人」や「エイリアン」という言葉を思い出すかもしれない。ただここで大事なのは、福井の絵のなかで人間と動物とエイリアンは、特に軋轢を起こすこともなく共存しているということだ。そして、それらの中には植物と思えるものがそこここにひっそりと佇んでいる。

その、楽しげで幸せそうな雰囲気は、この絵がカラフルであることや、直線が用いられていないことに由来するだろう。色は、ある部分ではいろんな色がモザイク状に配列され、ある部分ではひとつの色がアメーバのような形のなかを満たしている。つまり、さまざまな色と形のあり方が、彼の絵のなかにはある。また、矢印があったり、コインのようなものが紐にぶらさがったりしていて、さりげない動きを感じることができるのもポイントだ。

福井は2015年頃に統合失調症を発症した。幻視や幻聴がある中で、絵を描くと、気持ちを落ち着かせることができるという。制作は主に自宅で行い、紙やペンは、100円ショップで買った物を使っている。したがって、大きな作品も、よく見れば紙と紙との継ぎ目がある。そうした物理的な境界線をこえて多種多様な生き物が存在している、それが福井の作品にはかならない。

(保坂健二郎, 東京国立近代美術館)



タイトル：夢

作者：福井 誠

制作年：2012年

素材：紙、色鉛筆、油性マーカー、  
セロハンテープ

サイズ：1,785×3,240 mm

写真提供：高石 巧